

愛着、作者と作品、芸術鑑賞

はじめに

さて、今回の『愛着』について、作者と作品、芸術鑑賞』というものは、次のような内容のものであり、――まず、「愛着」であるが、例えば、われわれの身のまわりには、もう実に色々なものや活動などに満ちあふれているわけだが、毎日、われわれは、それらのものと「関わり」を持ちながら生きていくわけである。しかし、ただ単にそれらと「関わり」を持ちさえすれば、それだけですぐにその対象に「愛着」が生じるというものでもなく、やはり、その対象とある程度「慣れ親しむ」ということがあって、初めて、その対象への「愛着」というものは、生じて来るものである。それでは、ある程度、「慣れ親しむ」ということがあれば、すべて、その対象に「愛着」というものが生じて来るのかと問えば、もちろん、そうではなく、やはり、その中でも、「特に気に入っているもの」(或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につながるようなもの」)にこそ、いわゆる「愛着」というものは、はつきりと生じて来るものである。

一方、「作者」と「作品」との関係であるが、それは、まさに「親」と「子」との関係であり、母親は、自分の「胎内」で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ことになるが、それと全く同じように、作者の「頭の中」(或いは「心の中」)で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ということであり、そして、そのようにして生み出されたものが、まさに「作品」ということである。――そして、「作品」というのは、間違いなく、作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え+漠然としたもの」)から生み出されて来るものであり、それゆえ、「芸術鑑賞」とは、すなわち、最終的には、その「作品」が生み出された時の作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え+漠然としたもの」)へと「遡さかのぼる」ことに他ならないということである。その他、そのような内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和二年三月吉日(決定版)

如月翔悟

目次

はじめに

愛着について

- 一、音楽
- 二、子供の頃
- 三、食べ物
- 四、言葉
- 五、映画
- 六、人物
- 七、洋服
- 八、道具
- 九、趣味
- 十、愛するもの
- 十一、執着
- 十二、結び

作者と作品

序、芸術鑑賞

- 一、鑑賞の仕方
- 二、音楽鑑賞
- 三、古典芸能
- 四、四つの要素

* * *

愛着

愛着について

例えば、われわれの身のまわりには、もう実に色々なものや活動などに満ちあふれているわけだが、毎日、われわれは、それらのものと「関わり」を持ちながら生きているわけである。しかし、ただ単にそれらと「関わり」を持ちさえすれば、それだけですぐにその対象に「愛着」が生じるというものでもなく、やはり、その対象とある程度「慣れ親しむ」ということがあって、初めて、その対象への「愛着」というものは、生じて来るものである。それでは、ある程度、「慣れ親しむ」ということがあれば、すべて、その対象に「愛着」というものが生じて来るのかと問えば、もちろん、そうではなく、やはり、その中でも、「特に気に入っているもの」(或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につながるようなもの」)にこそ、いわゆる「愛着」というものは、はつきりと生じて来るものである。

例えば、われわれは、毎日、望むと望まざるとに関わらず、実にいろいろな「音楽」を耳にしていることになるが、それは、言葉を換えれば、われわれは、もう毎日、実にいろいろな「音楽」と何らかの意味で「関わっている」ことになるのである。とは言え、もちろん、われわれは、それらすべての「音楽」に興味や関心を示すわけではないだろう。やはり、その人にとって何らかの意味でその人の心が動いた時に、その「音楽」に興味や関心を示すことになるのだろう。——つまり、初めてその「音楽」を聞いた時から、はつきりと心が動く場合と、何回か聞いているうちに、やがて、その「音楽」に心惹かれるようになる場合とがあるかと思うが、そのどちらの場合であれ、何らかの「興味や関心」を示せば、もう一度、その「音楽」を聴きたくなるとともに、そのようなことが度重なることによつて、その「音楽」との関わりも、それだけ深くなつていくものである。それが、すなわち、その「音楽」と「慣れ親しんでいる段階」であるとともに、その「音楽」の「内容」を、より深く理解しようとしている段階でもあるわけである。

さて、その「音楽」が、その人にとってそれほどでもなければ、やがて「興味や関心」はうすれていくだろうが、一方、その「音楽」が気に入れば、さらには何度か、その「音楽」を聴くようになるだろうし、また、カラオケなどで、みずから歌ってみることも多くなり、それだけ、その「音楽」とは、より深く「慣れ親しむ」ことになるわけである。そうなれば、その「音楽」の「曲や歌詞」などが、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されるだけでなく、それを歌っている歌手の「顔の表情や身ぶりあるいは歌い方の癖」なども、一緒に「記憶保存」されることになるのだろう。そして、カラオケなどでみずから歌うような時には、その歌手の「物まね」などをして歌うことも、非常に多くなるかと思う。

それでは、その「真似る」ということに、一体、どういう意味があるのかと問えば、それは、「真似る」ことは、すなわち、「学ぶ」こととほとんど「同意語」であり、歌っている歌手の「顔の表情や身ぶりあるいは歌い方の癖」などを、すべて本物そっくりに真似て、その人になりきつて歌うことによつて、ただ単に外から見聞きしていた時には、まったく気づかなかつた、実に様々なことを、まさにわが身に感じて、実感として感じ取ることができるようになることである。——例えば、歌詞の一つ一つの意味が、より深く実感として理解できるようになるとともに、歌っている歌手の「歌い方の様々な特徴や微妙な息づかい、また、その時々々の心の微妙な動き」までも、「ああ、なるほど、ここは、

こういう感じ、や思いで歌っていたのか！」と、まさにわが身に感じて、実感として感じ取ることができるといふことである。つまり、ある対象を、そのままそっくり真似て、その対象そのものとなつて、その内面を徹底的に生きてみることは、そのままそっくりその対象（の内面）を実感として理解する「最良の方法」の一つである、ということである。

一、音楽

ところで、好きな「音楽」であれば、いわゆる「CD」などを買ってきて、その買ってきた「CD」などを何度も聴くことになるかと思うが、その買ってきた「CD」を何度も徹底的に聴くことによつて、その買ってきた「CD」で聴いた「音」が、そのままその「音楽」のまさに「原音」として、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されることになるわけである。そうすると、一体、どういふことが起こるかと言へば、それは、その「音楽」を聴く時には、いつもその人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」と比較対照しながら、その「音楽」を聴くようになるということである。——例えば、クラシック音楽などで、ベートーヴェン作曲の交響曲第五番「運命」を、カラヤン指揮・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽演奏の「レコード」などで、何度も何度も徹底的に聴いたとすれば、そのカラヤン指揮・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽演奏の交響曲第五番「運命」の「音」が、そのまま交響曲第五番「運命」のまさに「原音」として、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されることになるわけである。そうすると、今度、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」を聴く時には、いつもその人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」（*モノゾク指揮・ミューラー*管弦楽の「音」）と比較対照しながら、いわゆる交響曲第五番「運命」を聴くようになるということである。もちろん、いろいろな指揮者やオーケストラなどが演奏する交響曲第五番「運命」を数多く聴くようになれば、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されていた「原音」も、様々な影響を受けて、次第に変化をしていくことになるだろうが、しかし、基本的には、そういうことが言えるのではないかと思う。そして、われわれ人間が、ほんとうの意味で「愛着」を持つのは、まさにその「原音」なのである。

例えば、ある人が、昔であれば、蓄音機などで、その人の好きな「音楽」を何度も何度も徹底的に聴いたとすれば、その人の好きなその「音楽」の「原音」は、まさにその蓄音機から醸し出される特有の「音」であり、それゆえ、今日の「CD」で、同じ「音楽」を聴いたとしても、なるほど、雑音もなく、極めて綺麗な「音」ではあるが、しかし、その人の「心」を本当の意味で真に満たすことにはならないだろう。——なぜなら、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」と、その「音」とはぴったりと一致しないからである。それゆえ、どうしてもしっくりとつかない部分が残るとともに、そのしっくりとつかない部分が残るがために、逆に、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」とぴったりと合う「音」にめぐり逢いたいという想いにも襲われるわけである。それが、まさに狭義の「愛着」であり、そして、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」とぴったりと合うような「音」にめぐり逢えた時にこそ、その人の「心」は、本当の意味で真に

満たされることになるわけである。つまり、「ああ、そうそう、この音だ。私が若い頃に夢中になって聴いたあの時の音だ！」というような感じで、その当時の様々な「想い出」とともに、非常に懐かしく想い出されて来るということである。

二、子供の頃

それは、何も「音楽」だけの問題ではなく、基本的には、その他、すべてのことに言えることである。例えば、子供の頃に、近くの川や池、あるいは田んぼなどで、川ざかなやザリガニなどをアミで捕らえたり、また、カエルやオタマジャクシなどを捕まえたりしたこと、また、近くの雑木林では、カブトムシやクワガタムシなどを捕まえたり、また、セミやトンボなどを捕ったり、あるいは近くの裏山にのぼって、友だちとそこで遊んだりしたこと、また、学校の友だちや近所の子供たちとかくれんぼや鬼ごっこ遊び、また、メンコ遊びやビー玉遊び、あるいはベーゴマなどで遊んだり、さらに凧揚げや独楽廻し、また、竹馬などで遊んだりしたことなど、そういう子供の頃に何度も遊んだ場所や自然の風景というのは、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されている、まさに「原風景」であり、それゆえ、例えば、ザリガニ、カエル、トンボ、セミ捕り、また、かくれんぼや鬼ごっこ、メンコ遊び、凧揚げ、独楽廻し、その他、そういう言葉を聞けば、ほとんどの場合、その人が子供の頃に何度も捕ったり遊んだりした、その「原風景」が鮮やかに想い出されて来ると思う。なぜなら、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にまさに「原体験」としてはつきりと「記憶保存」されているからである。

そして、大人になれば、今度は、大人の立場から、子供たちの遊びを見る時には、必ずその人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されている、その「原風景」や「原体験」などと比較対照しながら、子供たちの遊びを見てみるとともに、自分が子供だった頃と同じような「遊び方」をしていけば、なぜか非常に懐かしく感じられるものだが、それは、自分自身の「原風景」や「原体験」とまさに一致するからであり、逆に、自分が子供だった頃と違ったように遊んでいる時には、何か違和感を感じたりするのにも、自分自身の「原風景」や「原体験」とどこか一致しないからである。――すなわち、われわれ人間というのは、どうしても自分自身の「原風景」や「原体験」と一致するようなものにこそ、「愛着」というものは感じるものである。もちろん、その場合、「愛着」を感じるのは、その人にとって、何か「楽しい想い出や懐かしい想い出につながるようなもの」であり、逆に、いやな、想い出したくないようなものに対しては、いわゆる「愛着」が生じるといふようなことは、基本的にはあまりないだろう。

三、食べ物

それは、食べ物や飲み物などに対しても、基本的には、まったく同じことが言えるのではないかと思う。確かに、われわれ人間というのは、新しい「食べ物や飲み物」などに対しては、極めて強い「好奇心」を示すものであるが、一方、われわれ人間というのは、いわゆる「慣れ親しんだもの」(或いは「慣れ親しんでいるもの」)、その中でも、「特に気に入っているもの」に対しては、はつきりと「愛着」を示すものである。例えば、いわゆる

る「おふくろの味」というものがあるが、それは、いったいどういうものかと言えば、それは、子供の頃から、母親が味つけをした料理を、ずっと食べ続けければ、当然のことながら、母親が味つけをした様々な料理にすっかり「慣れ親しむ」ことになるとともに、その「慣れ親しんだ料理（味）」のなかでも、「特に気に入っている料理（味）」こそは、まさにその人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはっきりと「記憶保存」されている。「おふくろの味」ということになるのだろうか。もちろん、広い意味では、母親が味つけをしたすべての料理が、すなわち、「おふくろの味」ということになるのかも知れない。

それはともかく、やがて、その人が大人になった時に、いわゆる「おふくろの味」が恋しくなるのは、一体、なぜなのか？ それはもちろん、その当時のいろいろな「懐かしい思い出」と深く結びついているからであるが、それとともに、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはっきりと「記憶保存」されている、まさに「深く慣れ親しんだ味」への郷愁（つまり「愛着」ということになるのだろうか。それに加えて、若しもその人が「或る味」にこだわる場合には、必ずその人の「頭の中」（或いは「心の中）」には、まさにその「或る味」というものが、はっきりと「記憶保存」されていて、その「或る味」にぴったりと合うようなものを、まさに求めていることになるのだろうか。そして、その「或る味」とは、基本的には、その人にとって「特に気に入っている味」ということにもなるのだろうか。さらに、プロの料理人ならば、より「新しい味」（理想の味）というものを探し求めることも多いかと思うが、例えば、ラーメンならラーメンの、これこそ、まさに「究極の味」というような、それをプラトン風に言えば、まさにラーメンの究極の「一なるもの」（それは「ラーメンのイデア」）を愛し求めるということにもなるのだろうか。

四、言葉

一方、「言葉」にしても、乳幼児の頃から、毎日、毎日、絶えず耳にし、また、それを幼児の頃から、使ってきた「言葉（日本語）」こそは、われわれ日本人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはっきりと「記憶保存」されている、まさに「原音（母国語）」であるが、その中でも、その人が生まれ育った郷土の「言葉（つまり方言）」こそは、その人にとっては、最も「深く慣れ親しんだ言葉」（つまり「原音」）になるわけである。それゆえ、その人は、その郷土の「言葉（つまり方言）」については、極めて微妙なニュアンスまで感じ分けることができ得るとともに、地方から都会へと出て、その都会で、自分が生まれ育った郷土の「言葉（つまり方言）」などを耳にすると、なぜか非常に懐かしい思いに襲われるのも、乳幼児の頃から、どこまでも深く「慣れ親しんできた言葉（方言）」にこそ、われわれ人間というのは、はっきりと「愛着」を感じるものだからである。それは、日本から海外へと出て、どこかの外国で生活をするようになれば、なおさらに、そのことをはっきりと実感することになるかと思う。

例えば、海外への留学であれ、あるいは仕事上での単身赴任であれ、今までとは全く違った、すべてが外国語の環境のなかで、一人で生活するようになれば、当初は、どうしても相手との「意志疎通」という点で、日本語の時のような思う存分の「意志疎通」というものは、なかなかできにくいとともに、ストレスもたまりやすいかと思う。そのような時に、日本語の話せる人間にめぐり逢えれば、何か救われたような思いに襲われるだろうし、

また、日本語のラジオ放送とかテレビ番組（ビデオ）などを見聞きすれば、なにか非常に懐かしい思いに襲われるとともに、自分が間違いない「日本人」であることをはっきりと思ひ知らされることにもなるのだろう。また、日本語の話せる人間のなかでも、外国人よりは日本人、日本人のなかでも同じ郷土の人、その「郷土の言葉（つまり方言）」などにめぐり逢ったりすれば、それこそ、もう「涙が出るほど懐かしい」という思いに襲われるだろうし、ましてや、それが家族の「言葉（声）」であったりすれば、もう感極まって、涙があふれ出て止まらないような「精神状態」に深く襲われるものではないかと思う。それは、なぜかと言えば、それは、乳幼児の頃から、どこまでも「深く慣れ親しんだ言葉（原音）」であり、そのどこまでも「深く慣れ親しんだもの」にこそ、われわれ人間というのは、はつきりと「親近感」（或いは「愛着」というものを感じるものだからであるとともに、そのどこまでも「深く慣れ親しんだもの」にめぐり逢った時にこそ、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されている、まさにその「原形（記憶）」とどこまでも深く「共感・共鳴」している「心的状態」でもあるからである。

五、映画

例えば、若い時に、ある「映画」を観て、非常に感動した場合、その感動した「映画」は、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されるものだが、その「記憶保存」されたものが、その人のその「映画」に対する「原形（記憶）」となるものである。その後、その「映画」を観る時には、必ずその人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されている、その「原形（記憶）」と比較対照しながら、観ることになるかと思う。そして、その映画を何回か観ていくうちに、その映画の「内容の理解」をより深めたり、また、新しい発見をしたりすることになるが、それとともに、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されている、その感動の「原形（記憶）」とほぼぴったりと合う場合には、「やっぱり、いい映画だ、ほんとうにいい映画だなあ」という感じで、どこまでもその「共感・共鳴」をより深めることになるかと思うが、一方、その感動の「原形（記憶）」と次第にズレが生じ、そのズレがだんだんと大きくなるに連れて、その「映画」への「思い入れ（熱）」というものも、次第に弱まっていくのが、ふつう一般的ではないかと思う。

ただ、ここで最も大事なことは、そのために、最初に観た時の「感動」まで消えてなくなるということ、決してないのである。それどころか、最初に観た時の「感動」とその「原形（記憶）」は、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」に忘れられない「思い出し」として、いつまでも「記憶保存」されていくものである。なぜなら、その時、その人は、何歳で、何月の何日の、天候は何で、どこかの何という映画館で、誰とどういう「心的状態」の時に、誰が主演の何という映画を、どのような気持ちで観たのか、そういうただ一度限りの「絶対的な時間と空間と状況」のなかで観たものであり、そのような「記憶」は、それだけ「より鮮明に」なりやすいということである。それが、まさに映画館で観る場合と、テレビ（或いはDVD）などで観る場合との、「決定的な違い」の一つなのである。

六、人物

例えば、若い頃に、プレスリーならプレスリーに夢中になった人は、そのプレスリーの「音楽や歌う姿」などが、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されているものだが、その場合、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されて、いわゆる「原形(記憶)」となるものは、いったいどういうものかと問えば、それは、やはり、ライブ・ステージをはじめ、映画、テレビ(ビデオ)、ラジオ、雑誌、その他、何であれ、その人の心が激しく動いた、印象のより強いいろいろな「場面」や、何度も繰り返し「レコード」などで聴き入った「音(原音)」などが、その「主たるもの」になるかと思う。というのも、印象の弱いものなどは、どうしても次第に忘れてしまうものだからである。そして、ひとたび、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)に、いわゆる「原形(記憶)」として、しっかりと「記憶保存」されてしまえば、もう容易なことでは、その「原形(記憶)」がうすれるということではなく、いつまでもはつきりと「記憶保存」されていくことが多いかと思う。

そして、今なおプレスリーの「熱狂的なファン」というのは、実際のプレスリーが、いったいどういう人間だったということよりも、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されている、まさにその「原形(記憶)」の中のプレスリーこそ、何よりも愛しているということである。すなわち、各人それぞれの「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと生きている「プレスリー」を愛しているのであり、実際のプレスリーを愛しているのかどうかは、また、別の問題になるということである。

例えば、マリリン・モンローが大好きだという時、それは、主に「スクリーンのなかで見たマリリン・モンロー」が大好きなのであり、実生活上のマリリン・モンローを好きになれるかどうかは、また、別の問題になるだろう。つまり、「熱狂的なファン」というのは、どちらかと言えば、「実像」(実際のあるがままの姿)よりも、むしろ「虚像」(そうあってほしい姿)あつてほしい姿)の方を愛しているのである。なぜなら、「虚像」(そうあってほしい姿)の方にこそ、プレスリーが、まさにプレスリーとして、また、マリリン・モンローが、まさにマリリン・モンローとして、最も「理想的な形」で、まさに生き生きと「最も魅力的に躍動(活動)」している姿を、はつきりと見せてくれているからである。

七、洋服

それはともかく、われわれ人間というのは、もちろん、この世にあるあらゆるものに「愛着」を持つわけではなく、そのなかでも、その人が何らかの意味で関わりを持ち、それなりに「慣れ親しんだもの」であるとともに、「特に気に入っているもの」(或いは「懐かしい思い出につながるようなもの」)にこそ、はつきりと「愛着」というものを感じるということである。例えば、ある人が、デパートなどで、洋服なら洋服を気に入って買っただけでは、まだその「洋服」に「愛着」が生じるということはないだろう。やはり、その「洋服」を実際に着てみて、初めてその「洋服」が自分に合うか合わないかを実感することになるわけだ。そして、もし、その「洋服」が自分にあまり合わなければ、その「洋服」を着る機会も、自然と少なくなるだろうが、一方、その「洋服」が自分でも気に入り、また、他人からも似合うじゃないかと言われるれば、当然、その「洋服」を着る機会も

自然と増えるかと思う。それが、すなわち、その「洋服」と「慣れ親しんでいる状態」であるとともに、その「洋服」を着て、友だちや恋人、その他、誰とであれ、楽しい時を過ごしたとか、どこどこに行ったとか、その他、そういう何か楽しい「思い出」など結びついてくれば、なおさら、その「洋服」というものに対して、「愛着」というものが、はっきりと生じて来るものである。ましてや、それが、職業上であれ、趣味であれ、その他、何であれ、その人にとって、心から気に入っている「洋服や制服あるいはユニホーム、その他」などであれば、なおさらに、それへの「愛着」というものは、より深い、「愛着」(つまり狭義の「愛着」)になっていくことが、非常に多いということである。

八、道具

例えば、われわれは、仕事上であれ、趣味であれ、その他、何であれ、様々な「道具」類を使うことは、非常に多いかと思うが、その場合、まず、どういう「道具」を求めるかと言えば、基本的には、よりよい「道具」を手に入れたいわけである。というのも、「道具」が悪ければ、思うような仕事は、できにくいからである。とは言え、もちろん、買ったばかりの真新しい「道具」では、まだその人の手に十分になじんでいないために、どうしてもしつくりといかないところがあつて、使いづらいわけだが、やがて、何度も何度も使つて、「慣れ親しんでいく」うちに、次第にその人の手にしつくりとなじむようになり、そうなることによつて、初めて、その人の手の一部のようにしつくりと合つた「道具」になるということである。それが、まさに使い込んだ「道具」であり、その使い込んだ「道具」のなかでも、特に、お気に入りの「道具」となっているものにこそ、いわゆる、より深い「愛着」というものを感じるようになるということである。

例えば、スポーツの「用具」などにしても、買ったばかりの「真新しいもの」は、まだその人の「手や身体」に十分になじんでいないために、どうしてもしつくりといかないところがあつて、使いづらいわけであるが、やがて、何度も何度も使つて、どこまでも深く「慣れ親しんでいく」うちに、次第にその人の「手や身体」にしつくりとなじむようになり、そうなることによつて、初めて、その人の「手や身体或いは心魂」にぴったりと合つた「道具」になるわけである。それが、まさに使い込んだ「用具」であり、その使い込んだ「用具」というのは、まさにその人自身の「用具」となっているものである。それゆえ、その使い込んだ「用具」は、その人にとっては、極めて大事なもので、あるいはかけがいのないものであり、それゆえ、それを失うということは、極めて大きな「ショック」であるとともに、極めて大事なものを失つたという「喪失感」に強く襲われるものである。それが、まさにより深い「愛着」(つまり狭義の「愛着」)ということになるわけである。

九、趣味

例えば、最近では、いわゆる「カラオケ」が大変なブームになっているかと思うが、その場合、その人が今までに「慣れ親しんだすべての曲」に対して、すべて同じように「愛着」を持つということではないだろう。やはり、その人が「慣れ親しんだ数多くの曲」のなかでも、「特に気に入っているもの」(或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につな

がるようなもの」にこそ、より強い「愛着」を感じるものであり、それが、すなわち、一般的な「愛着」よりは、より深い「愛着」（つまり狭義の「愛着」ということであり、それは、その人にとって極めて大事なものの、あるいはかけがいのないものとして、その人の「心の中」では、いわば「ベスト10」の中に入るようなものになるのだろう。

例えば、それは、様々な「ゲーム」などでも、まったく同じことであり、その人が、今までに「慣れ親しんだすべてのゲームソフト」に対して、すべて同じように「愛着」を持つということではないだろう。やはり、その人が「慣れ親しんだ数多くのゲームソフト」のなかでも、「特に気に入っているもの」（或いは「楽しい、思い出や懐かしい、思い出につながるようなもの」にこそ、より強い「愛着」を感じるものであり、それが、すなわち、一般的な「愛着」よりは、より深い「愛着」（つまり狭義の「愛着」ということであり、それは、その人にとって極めて大事なものの、あるいはかけがいのないものとして、その人の「心の中」では、いわば「宝もの」のようになっていているものである。それゆえ、その人にとつて、それを失うことは、大変な「ショック」であるとともに、極めて大事なものを失ったという「喪失感」に強く襲われることにもなるかと思う。ましてや、それが、その人にとつて、より大事な「愛車、愛蔵品、マイホーム、さらに、植物（園芸品）、動物（愛玩動物）、そして、人間（家族）、その他」ということになれば、なおさらのことである。

十、愛するもの

例えば、その人が、何よりも大事にしている「愛車」などを傷つけられたり、盗まれたりすれば、もう大変な「ショック」に襲われるだろうし、ましてや、長期のローン組んでやつとの思いで手に入れた「マイホーム」などを火事などで焼失したりしたら、それこそ、もう全身から力が抜けていくような大変な「ショック」を受けるとともに、極めて大事なもの（或いはかけがいのないもの）を失ったという「喪失感」に強く襲われるだろうし、あの時、もう少し気をつけていたらという後悔の念に強く襲われることにもなるのだろう。また、その人が、毎日、手を加えて、心から大事にしていた「園芸品」などを枯らしたり、盗まれたりすれば、やはり同じような思いに襲われるだろうし、ましてや、長年、愛情を持って、どこまでも深く慣れ親しんだ「愛玩動物」などを失えば、それこそ、まるでわが子を失った時のような大変な「ショック」を受けるとともに、何物にも換え難いものを失ったという「喪失感」と「哀惜の情」に強く襲われることにもなるわけである。さらに、われわれ人間にとつて、例えば、親であれ、子供であれ、兄弟（姉妹）であれ、あるいは夫や妻であれ、その他、もう誰であれ、どこまでも深く慣れ親しんだ「家族」の一人を失うことは、まさに人生最大の「悲しみ」のひとつであり、その時には、何か「心の中」で確かなものが音を立てて崩れていくような大変な「ショック」を受けるとともに、何者にも換え難い「唯一無二のもの」を失ったという極めて強い「喪失感」と「哀惜の情」にどこまでも深く襲われることにもなるわけである。それは、その人のその対象への「愛着（愛情）」の深さにほぼ正比例して、それだけより深い「喪失感」と「哀惜の情」（或いは「愛惜の情」）に強く襲われることになるということである。

ところで、「愛着」というのは、いわゆる「執着」とともに、仏教上の言葉では、われわれ人間を苦しめる「煩惱」の一つではあるが、その「愛着」と「執着」とはほとんど同じような「意味合い」のものであり、それゆえ、その「微妙な違い」をはっきりと感じ分けることは、極めて難しいように思われがちであるが、しかし、意外にそれほど難しいことではなく、基本的には、誰でも容易に感じ分けることができるものではないかと思う。

それでは、「愛着」と「執着」との違いは、一体、どこにあるのかと問えば、それは、「愛着」というのは、対象への「愛情と思慕」であり、一方、「執着」の根底にあるものは、対象への「欲望と情念」である。——つまり、「愛着」というのは、本来、その対象への強い「愛情」から生じるものであり、それゆえ、その対象への「欲」は、比較的少ないものであるが、一方、その「欲」がだんだんと強くなるにつれて、それは、「愛着」から「執着」へと変化していくものであり、それは、その人自身の「心の中」でも、はつきりと自覚できるものではないかと思う。

例えば、あの人がまるで「宝もの」のように思っているものを、それを非常に高いお金で売ってくれないかと言われた時に、その人は、一体、何と答えるだろうか？ 恐らく、その人は、いや、いくらお金を積まれても、これだけは、売るわけにはいかない、と答えるだろう。そして、そう答えるその人の「心の底」にある思いこそは、まさにその人のその対象へのより深い、「愛着」(つまりより深い、「愛情や思慕」ということになるわけだ。

——例えば、先祖代々の「土地」を売ってくれないかと言われた時に、いや、この土地は、いくらお金を積まれても売るわけにはいかないという時、それは、その「土地」への単なる「執着」などでは決してなく、むしろ、より深い、「愛着」(つまりより深い、「愛情や思慕」ということになるわけである。一方、その「土地」を何が何でも手に入れたいという思いこそは、まさに「執着」であり、その「執着」の根底にあるものは、やはり「欲望や情念」ということになるかと思う。

つまり、われわれ人間が、ある対象により、深い「愛着」(つまりより深い「愛情や思慕」)を真に寄せている場合、その対象は、その人にとって極めて大事なもので、あるいはかけがいのないもの、また、心の底から思いを寄せていて、まさに「宝もの」のように感じ、何物にも換え難いものであつて、それゆえ、それを失った時には、その人は、極めて大きな「ショック」を受けるとともに、もう何物にも換え難いものを失ったという極めて強い「喪失感」に襲われるものである。それは、その対象にどのくらい深い「愛着」(つまりどのくらい深い「愛情や思慕」)を寄せているかにほぼ正比例して、それだけより深い「喪失感」と「愛惜の情」に強く襲われるということである。

ちなみに、われわれ人間には、いわゆる「収集癖」というものがあるが、それこそ、まさに「執着」ではないかということになるが、確かに、それは、一種の「執着」であり、何が何でも手に入れたいという「欲望や情念」でもあるわけである。つまり、何かを手に入れたいというのは、基本的には、すべて「欲」になるわけである。一方、いわゆる「愛着」が生じるためには、その対象と「慣れ親しむ」ということが、どうしても「必要不可欠」であるとともに、そのなかでも、「特に気に入っているもの」(或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につながるようなもの」)にこそ、まさにより深い「愛着」(つまり

より深い「愛情や思慕」が、はつきりと生じて来るものである。それゆえ、「収集」というのは、最初は、どうしてもそれを手に入れたという「執着」（「欲望や情念」）から始まることが多いかと思うが、しかし、一たび、それが、自分の手に入れば、今度は、それと「慣れ親しむ」という段階になり、その「慣れ親しんだ数多くの収集品」のなかでも、「特に気に入っているもの」（或いは「懐かしい思い出につながるようなもの」）にこそ、まさにより深い「愛着」（つまりより深い「愛情や思慕」）が、はつきりと生じて来るとともに、それは、その人にとって極めて大事なものであるいはかけがいのないもの、また、心の底から思いを寄せていて、まさに「宝もの」のように感じ、何物にも換え難いものであつて、それゆえ、それを失った時には、その人は、極めて大きな「ショック」を受けるとともに、もう何物にも換え難いものを失ったという極めて強い「喪失感」と「愛惜の情」に深く襲われるということである。それは、その人が、その対象に対して、どのくらい深い「愛着」（つまりどのくらい深い「愛情や思慕」）を寄せているかにほぼ正比例して、それだけより深い「喪失感」と「愛惜の情」とに強く襲われるということである。

十二、結び

最後に、もう一度、いわゆる「原風景」と「原体験」について、考えてみたいと思うが、例えば、ある人が生まれ育った「郷土」というのは、その人がまさにどこまでも深く「慣れ親しんだ土地」であり、それゆえ、その郷土の「町の様子や自然の風景」（或いはそこでの様々な「体験や経験」）などは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にはつきりと「記憶保存」されているものである。やがて、その人が、都会などに出て、そこで何年も生活するようになってから、久しぶりに「郷土」に帰ってきた時に、その人が、まず感じることは、「……ああ、ずいぶん変わったなあとか、あるいは昔とちつとも変わっていないなあ」ということになるかと思う。それは、一体、何を意味するのかと言えば、それは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にはつきりと「記憶保存」されている、その郷土の「原風景」と、現在の「郷土の様子」とをまさに「比較対照」しながら見ているということである。そして、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にはつきりと「記憶保存」されている、その郷土の「原風景」こそは、まさにその人の《心の「故郷」》であり、それは、現実の「故郷」がたとえどのように「変化・変貌」しようとも、そういうこととは全く関係なく、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）で、一生涯、変わることなく生き続ける、まさに《故郷》の「原風景」そのものになるということである。そして、何々と聞いて、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にいつもはつきりと思い浮かんで来る「記憶」こそは、まさにその人のその「対象」（事柄）に対する「原形（記憶）」であるとともに、その人のまさにその「対象」（事柄）に対する「体験（経験）記憶」でもあるということである。

*

*

作者と作品

作者と作品について

例えば、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)に内在する様々な「思いや考え+漠然としたもの」と、その出来上がった「作品」とがびつたりと一つに重なり合えば、それが、まさに「完成」の状態であるが、しかし、それが少しでも「ズレ」ていれば、その「作品」は、その作者にとっては、真の「完成品」とはならず、それゆえ、そのことがいつも「頭の中」(或いは「心の中」)に残っていて、この「部分」さえできれば、すべて完成なのに、と、その作者をしていつまでも悩まし続けることになるかと思う。

それでは、このことはいったい何を意味するのかと言えば、それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間が何か「ものを創ろう」とする場合には、必ず、まずその人の「頭の中」(或いは「心の中」)でその「創ろうとするものをイメージ」することになるかと思う。もちろん、その「イメージ」は、一から十まですべてはつきりとしているものではなく、多くの漠然とした思いもたぶんに含まれていて、その人自身にもよく分からない部分があつて、それは、実際に「ものを創っていく過程」で次第に漠然としていた部分もはつきりとして来ると同時に、最初に、その人が「イメージ」(つまり「最初に考えたり想ったりしたもの」とは、かなり違ったものになることも極めて多いわけである。それは、なぜかと言えば、それは、まさに「ものを創りながら新たにあれこれ考え深めている」からである。それゆえ、最初に、その人が「イメージ」したものはかなり違ったものになるとともに、出来上がったものを見ていちばん驚いているのは、誰でもない「作者自身」ということも極めて多いことである。

それでは、そのことをもう少し深めて考えてみたいと思う。例えば、われわれは、「自分を知る」方法としては、まず、自分自身をよく観察して、自分とはあれこれこういう性格であるとか、大体こういう人間だとかという、そういうその人なりの「自己認識」を持っているかと思う。しかし、それは、その人にとって自覚できる「自分」に対しての認識であり、それゆえ、その人自身にも自覚できない「もっと深奥にある本来の『自分自身』」というものを知ることにはできない。それではどうすれば、自分にさえ自覚できない「もっと深奥にある本来の『自分自身』」とめぐり逢うことができ得るのだろうか？ もちろん、それにもいろいろ方法があるかと思うが、その一つの「方法」として、いわゆる「ものを創り出す」(つまり「創作活動」というものがあるかと思う。

つまり、ものを創り出す過程というのは、ここはこういうふうにしたほうがよいとか、ここはどうしてもこうでなければならぬということや無限に積み重ねることであり、そして、そのようなことを無限に積み重ねることによって、やがてその人の「心の中」に内在する様々な「思いや考え+漠然としたもの」と、その出来上がった「作品」との間にこれという「ズレ」がなくなり、いわばびつたりと一つに重なり合うような状態に達した時に、まさに「これでよし！」という「完成」の状態になるかと思う。そして、その過程での「ここはどうしてもこうでなければならぬ」という微妙な感じとか、また、自分の心とどうしてもびつたりと一つに重なり合わない微妙な〈ズレ〉を感じている「ようなところ」こそ、ふだんその人自身でも自覚できない「もっと深奥にある本来の『自分自身』」が、その「姿」をはつきりと見せているということである。——つまり、その人自身にもどうにもならないその人自身の本質的な「色、音、形(造形)、言葉、その他」などととも

その人ならではの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが、自ずと現出することにもなるということである。

もちろん、ものを創り出すという行為は、そのまま新しい「自分」を創り出すことにもつながるものである。それゆえ、「作品」とは、その人がどんどん大きく「内的成長」していくために、何度も脱皮していったいわば「抜け殻」的なものとも言えるものであるとともに、「作品」とは、その作品が生み出されたその当時のその人の「内的状態」が如実に表れているものである。したがって、過去に生み出された様々な自分の「作品」を見れば、その当時の自分の「内的状態」（或いは「内的成熟度」）がどの程度のものであったかがあきれるほどよく分かるということである。——それゆえ、月並みのものばかりを創り出している人は、いつまで経っても、「月並みの自分」しか創り出せないことになるし、また、その人の生み出した「作品（抜け殻）」を見れば、その人の「内的成熟度」が、どの程度のものであるかは容易に分かるものである。

それでは、「作者」と「作品」との関係は、一体、どういうものかと問えば、それは、まさに「親」と「子」との関係である。つまり、母親は、自分の「胎内」で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ことになるが、それと全く同じように、作者の「頭の中」（或いは「心の中」）で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ということであり、そして、そのようにして生み出されたものが、まさに「作品」ということになるわけである。——例えば、人間の「赤ん坊」は、親の「遺伝子」をしっかりと受け継いでこの世に生まれて来るものであるが、一方、「作品」というのは、その作者の「遺伝子」（その人の本質的なもの）をしっかりと内に宿して生み出されるものである。それゆえ、確かに、「子供」や「作品」というのは、まさに親の「似像」ということになるかと思うが、しかし、それは、完全に「一体化する」ものではない。

なぜなら、「作品」というのは、その時々の作者の「思惟内容」の「外的表現」であり、従って、「作品」が生み出された時の「内的状態」と、その「作品」とはたとえ「一体化」するとしても、作者の「内的状態」というのは、どんどん「変化・成長」していくものだからである。それゆえ、現在の作者の「内的状態」というのは、過去の様々な「内的状態」を踏まえて大きくなったものであり、従って、本来、「親（作者）」のほうが「子供（作品）」より優れていることになるかと思う。もちろん、「作品」のほうが「作者自身」よりも優れているという場合もあるだろうが、しかし、その場合にも、真に優れた「作品」を生み出したという場合は、その「作品」とともに、作者自身も「内的成長」をしていることになるかと思う。ただ、その人がたとえ「内的成長」していても、例えば、実際の様々な「人間関係」や日常の「言動」などにおいて、人間としていろいろ「未熟な面」を暴露するとしても、それはまた別の問題になるかと思う。

例えば、モーツァルトやベートーヴェンなどは、世界的に認められた真に優れた「作曲家」である。しかし、実際の様々な「人間関係」や日常の「言動」などには、いろいろと問題があったかと思う。それは、一体、どうしてかと言えば、もちろん、音楽の場合には、特に「右脳」の発達が大事になるが、それに加えて、一般的には、次のような理由があるからである。——まず、「作品」を生み出す時には、ふつう他人から離れて、自分一人だけになって、いわゆる「創作活動」に耽っている状態になるかと思う。ということは、様々な人間との直接的な「関わり方」の「上手下手」は、特に関係ないことになるとともに、

ものを創り出す人間の場合には、どうしても「一人で過ごす」時間が多くなるために、いろいろな人間との実践的な「関わり」があまり十分ではない場合には、どうしてもいろいろな場面での「対応の仕方」があれこれぎこちなくなる傾向があるということである。

また、本格的な「思考(思索)活動」や「創作活動」などにどこまでも深く溶け込んで、一種の「没我的状態」になっているということは、日常の様々な「欲望や感情」などに振りまわされているふだんの雑念とした「自我」から離れて、いわゆる超「自我」(つまり「純粹自己」)になって仕事をしている状態であり、そこからこそ、真に優れた「作品や思想」などが生み出されることになるかと思う。——従って、様々な「欲望や感情」などに振りまわされているふだんの雑然とした「自我」の時と、何か真に優れた「作品」が生み出される時の超「自我」(つまり「純粹自己」)の時とは、たとえ同じ人間であっても、かなり違って来るということである。なぜなら、ふだんの「自我」というのは、プラトン風に言えば、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理知的部分」の、この三つから成り立っているのに対して、超「自我」(つまり「純粹自己」)の時には、「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」などから離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されて活動をしている状態であるからである。

むしろ、実際の様々な「人間関係」や日常の「言動」等においても、真に「優れている」のが、まさに「ベスト」ではあるが、しかし、古今東西の傑出した「思想家や芸術家」などの「日常の生活ぶり」というものを見てみても、必ずしもそうなっていないのは、一体、どういうことなのか？ それは、彼らがまさに超「自我」(つまり「純粹自己」)になっているような時には、確かに優れた「作品や思想」などが生み出されやすくなるわけだが、しかし、ふだんの「自我」に戻った時には、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうということである。

*

*

それに加えて、例えば、仕事をはじめ、芸術、芸能、スポーツ、趣味、その他、何であれ、何か一つのこと「特化している」ような場合、その分野に関しては専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けていながらも、その分野(専門)から離れてしまうと、ふつうの人(或いは「ふつうの人以下」)になってしまうというものは、一体、どういうことなのか？ それは、次のようなことである。——例えば、仕事でも、音楽でも、スポーツでも、その他、何であれ、(子供の頃から)、そのことを何年も徹底的に学習し続ければ、やがては、専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けることになるだろうが、しかし、それは、人間として真に「内的成長(成熟)」することとは、全く全然違うことなのである。それでは、一体、何がどのように違うのかと言えば、それは、何か一つのこと「特化する」というのは、ある一つのことの専門的な「知識や技術」などの習得であり、それは、いわば「道の器用」であり、その「道の器用」というのは、その人の人間としての成熟度とは全く関係なく、本人の努力次第でいくらでも上達でき得るものである。

一方、人間として真に「内的成長(成熟)」するというのは、一つのこと「特化する」ことではなく、人間としての総合的な「内的成長(成熟)度」であり、それは、若い時から極めて旺盛な「知的遍歴」などを経て、つまり、もの凄い「知識欲」(或いは「真善美欲」)などであるが、それこそは、まさに「神的な恋(エロス)」であり、それをプラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」(つまり「イデア界」)の方へと想いを寄せ

て、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、そのようなもの凄い「知識欲」であり、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、初めて、物事を極めて厳密に「認識（識別）」でき得るような真の「思考（思索）能力」というものが、しっかりと身につくことになるのである。

それは、つまり、その人の「生まれ育った環境（つまり家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他）」などの影響を非常に強く受けて自ずと形成される、その人なりの「ものの方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを、あらためて徹底的に「考え直して」みると、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それでは、こうなのかと、次から次へと「考え方」を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまい、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥ってしまうわけであるが、それは、言葉を変えれば、まさに根底からの「自己改革」が起こっている状態であり、そのような「心の状態」から、やがて、真に「内的成長（成熟）」を遂げることによってこそ、初めて、「自らものを考え、自ら判断する自由を得る」ことにもなるわけである。

そして、人間として真に「内的成長（成熟）」することによって、初めて、人間として真に成熟した「ものの方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。それは、すなわち、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になる、ということであるとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。それに加えて、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するということである。それゆえ、人間として真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、初めて、人間として真に成熟した、より客観的で、より普遍的な「ものの方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。

*

*

例えば、真に優れた「思想家」などであれば、当然のことながら、その人の「理知的部分」というのは、真に優れているはずであるが、それでは、どうしてそのような真に優れた「理知的部分」を持ち合わせていながら、様々な「欲望や感情」などを自分で想うようにコントロールできないのだろうか？ それには、次のような理由があるからである。

つまり、われわれ人間には、いわゆる「二つの源泉」があり、その一つは、人間以外のほかの動物にもすべて共通した、いわゆる「本能（欲望）的部分」を源泉とするものであり、そして、もう一つは、「人間への進化」の過程において生じてきた、いわゆる「理性的部分」を源泉とするものである。そして、当然のことながら、「本能（欲望）的部分」のほうが「理知的部分」よりも遙かに「根源的なもの」であり、それゆえ、いくら「理知的部分」で様々な「欲望や感情」などを抑えようとしても、なかなか思うようにコントロールできずにどうしても振りまわされてしまうのも、結局は、「本能（欲望）的部分」のほうが遙かに「根源的なもの」だからである。しかし、一方、様々な「欲望や感情」などをしっかりとコントロールできているならば、その人こそは、まさに「理知的部分」に全面的に支配されている人たちであり、例えば、ソクラテスなどは、まさにそのような人であったとい

うことになるかと思う。

それはともかく、生み出された「作品」は、やがて作者の手を離れて、「作品」は、自らの「生命」（生命力）でひとり歩きを始めることになるかと思う。それは、母親の胎内から生まれた「赤ん坊」が、やがて自らの「生命」（生命力）でひとり歩きを始めるのと、基本的には全く同じことになるかと思う。

序 芸術鑑賞

例えば、「作品」というのは、確かに作者の「思惟内容」（つまり様々な「思いや考え」+ 漠然としたもの）から生み出されるものであり、それゆえ、その作者ならではの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが、その「作品」のなかに反映されているものであるが、しかし、ひとたび作者の手から離れてしまえば、今度は、その作者の「考えや思惑」などとはまた別に、「作品」そのものは、自らの生命力でひとり歩きを始めていくものである。それは、ちょうど母親から生まれた「赤ん坊」が、まさにその親の「遺伝子」をしっかりと受け継いでこの世に生まれて来るものであるが、しかし、ひとたび親の手から離れば、親の「考えや思惑」などはまた別に、その「子供」は、自らの生命力でひとり歩きを始めていくようなものである。

一方、その「作品」を鑑賞する人たちは、どうしてもその人なりの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを通して、いわゆる「作品」を鑑賞していることになるかと思う。しかし、それでは、その人の「色メガネ」を通して、その「作品」を鑑賞していることになってしまいうだろう。それゆえ、一度、その人の「色メガネ」を取り外した「純粋な眼」で、「作品」そのものを鑑賞することが、何よりも大事なことになるかと思う。なぜなら、そうでなければ、いわゆる「作品」そのものを客観的に鑑賞していることにならないからである。それに加えて、ただ単に「作品」を外からあれこれ「分析的に鑑賞」するだけではなく、さらに、その「作品」のなかに深く溶け入っては、いわゆる内から「厳密に鑑賞する」（例えば、絵画では厳密な「模写」や「修復」などを行なう）ことによって、その「作品」が生み出された時の、まさにその作者のあるがままの「心の状態」（その時の様々な「思いや考え」+ 漠然としたもの）にまで遡さかのぼって行くことが可能になるとともに、その作者のほかの作品に対しても、そのような「厳密な鑑賞」を何年も積み重ねることによってこそ、最終的にはその作者自身の最も深奥に内在しているであろう、その人の「中心核」（つまり「魂」そのもの）にまで遡さかのぼって、それと終には一体となることによって、その作者自身の「中心核」（つまり「魂」そのもの）をわが身にかけて、実感として感じ知ることにもなるということである。それが、まさに芸術鑑賞の「最究極的な目的」の一つにもなるのだろう。

一、鑑賞の仕方

それでは、いわゆる「芸術や芸能」などの「鑑賞の仕方」をもっと具体的に説明してみたいと思うが、その場合、われわれにとってもっとも身近でわかりやすい例としては、例えば、いわゆる「物まね番組」などを見聞きしている時の「鑑賞の仕方」こそは、まさに

「理想的な鑑賞方法」の一つである、ということである。それは、一体、どのような意味合いになるのかと言えば、それは、次のようなことである。

例えば、われわれが、ある歌手の歌を巧みに真似ている人を見聞きしている時には、必ず、「二つのもの」をあれこれ比較対照しながら見聞きしていることになるかと思う。つまり、一つは、われわれの一人一人の「頭の中」（或いは「心の中」）にその人なりに「記憶保存」されている「ある歌手の歌い方」であり、そして、もう一つは、まさに「その歌手を巧みに真似ている人の歌い方」である。そして、われわれは、この「二つのもの」、つまり、「歌手の歌い方と真似する人の歌い方」とをつねに比較対照しながら、その一つ一つをあれこれ「分析的に見聞き」していることになるかと思う。そのように「……つねに比較対照しながら、その一つ一つを分析的に見聞きすること」によってこそ、その歌手の「歌い方」の、実にいろいろな特徴などがはっきりと見えて来るということである。

そして、そのような「方法」が、まさにそのまま「芸術や芸能」などの「鑑賞の仕方」にも当てはまるということである。——つまり、「二つのもの」をつねに比較対照しながら、その一つ一つをより厳密にかつより分析的に見聞きすることによってこそ、今まであまり分析せずに、そのまま素直に見聴きしていた時には全く気づかなかった、実にいろいろなことがはっきりと「認識（識別）」できるようになるということである。——そして、もう一つの「方法」というのは、まさに「自ら物まねを試みるという方法」であり、この「方法」こそは、まさに「最上の方法」になるかと思う。

例えば、カラオケなどで、ある歌手のまねをそれこそ顔の表情から身振り或いは声の出し方その他も何から何まですべて真似て、つまり、その歌手になりきって歌を歌ってみると、今まで、ただ単に「外から見聞きしていた時」には全く気づかなかった、実にいろいろなことが、例えば、その歌手が、「……なぜあのような顔の表情や身振り或いは声の出し方などをする」のかが、まさに手に取るように、「……ああ、なるほど、ここはこういうことだから、こういう感じになるのか！」と極めて微妙なところまで、つまり、その歌手のその時々「心の微妙な動きや息づかい」までも、また、その時々「顔の微妙な表情や身振り」までも、まさにわが身を感じて、実感として感じることができるようになるということである。そして、この「方法」こそは、まさに「内から観る」という方法であり、それは、自らその「対象」になりきって、その「内面」（つまり「内的世界」）を徹底的に生きてみることによってこそ、その「対象」をまさにわが身を感じて、実感として感じることができるということである。（それは、「書写、写経、絵の模写、その他」、すべて同じことである。）

二、音楽鑑賞

それでは、もう少し幾つかの具体的な例を挙げて、それぞれについてわかりやすく説明していきたいと思うが、それは、次のようなことである。

例えば、音楽であれば、クラシック音楽を初めとして、歌謡曲、ポップス、ジャズ、ラテン音楽、シャンソン、民族音楽、その他、実にいろいろなジャンルの音楽があるかと思うが、ここではクラシック音楽（例えば、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲）を例として考えてみたいと思う。——まず、その音楽をまったく知らない人たちであれば、

とにかく一度どういう音楽なのか、そのピアノ曲をCDなどで聴いてみることから始めることになるかと思う。そして、一度その音楽をCDなどで聴いてみて、あまり「心惹かれるようなところ」がなければ、そのまま「興味や関心」はうすれ、再び、聴く機会も少なくなっていくだろう。しかし、一方、どこか「心惹かれるようなところ」があつて、何らかの「興味や関心」を持てば、逆に、その音楽をもう一度聴きたくなるだろうし、そのようなことを何度も繰り返しいくうちに、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)には、その「音楽」が、その人なりに「記憶保存」されることになるかと思う。

そして、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にその「音楽」がどのくらいしつかりと「記憶保存」されるかは、その「音楽」をどのくらいより厳密かつより分析的に聴いたかにほぼ正比例するとともに、その「音楽」(つまり「CDで聴いたベートーヴェンの『月光』というピアノ曲」)こそは、その人にとってのまさにその音楽の「原音」になつていくということである。

例えば、その人が、あるコンサート会場などで、いわゆるベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を聴くような機会に恵まれた時に、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)では、一体、どのようなことが起こるかと言えば、それは、次のようなことになるかと思う。——つまり、その人は、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、今までに或るCDで何度となく聴いているので、そのCDで聴いたベートーヴェンの『月光』というピアノ曲が、まさに「原音」として、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にしつかりと「記憶保存」されている状態であるということである。それゆえ、その人は、今、まさに目の前で演奏されているベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を聴きながら、その演奏されている「音楽(音)」と、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)にしつかりと「記憶保存」されているベートーヴェンの『月光』というピアノ曲の「音楽(音)」とを、まさに「……つねに比較対照しながら、その一つ一つをより分析的に、また、より厳密に聴き分けようとして聴いている」状態にあるということである。そして、それこそは、まさに「音楽鑑賞の言わば理想的な方法」であるということである。

そして、その人がどのくらい「より厳密かつより分析的に聴き分ける」ことができ得るかは、まさにその人の「音楽の諸能力」(つまりその人が「初級段階、中級・上級段階、そして、プロ段階」のどの辺にいるか)にほぼ正比例して、それだけ「より厳密かつより分析的に聴き分ける」ことが、でき得るようになるということである。それゆえ、例えば、その人が「初級段階」であれば、当然のことながら、その一つ一つの音を「厳密に聴き分ける」ことはでき得ず、いわば「全体を一つの音」のように聴いている状態であり、また、「中級・上級段階」になれば、その段階に応じて、より厳密に「音」を聴き分けることができ得るようになるとともに、いわゆる「プロ段階」になれば、もちろん、それぞれ個人差はあるだろうが、その一つ一つの「音」を、どこまでも厳密に聴き分けることができ得るようになるということである。

次に、自分自身が、まさに「歌を歌ったり、楽器演奏を行なったりする場合」であるが、まず、歌を歌うということは、基本的には誰にでもできることであるが、しかし、少しでもうまく歌おうとするためには、どうしてもそれに見合った努力が必要不可欠になって来るかと思う。それは、楽器を演奏する場合でも全く同じことであり、どの楽器を習うにしても、その人に見合った期間、練習を積み重ねることが、どうしても必要不可欠になって

来るということである。そして、その人が「初級段階、中級・上級段階、そしてプロ段階のどの辺にいるか」にほぼ正比例して、その人の「歌をより厳密に歌う能力」や「楽器をより厳密に演奏する能力」なども、ほぼ決まることになるかと思う。

そして、例えば、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、最初から最後まで、楽譜通りに一つ一つの音を可能な限り厳密にピアノで弾き進めれば、それこそ、そのベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、これ以上に深く理解する方法はなく、また、これ以上に、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、わが身にかけて、実感として深く感じ知る方法はないということである。つまり、これこれは、まさに「最上の鑑賞方法」であるということである。

三、古典芸能

次に、日本の場合、「古典芸能」というものがあり、それは、能を初めとして、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎、邦楽、舞踊、また、浪曲、講談、落語、その他、もう実にいろいろなものがあるかと思うが、それでは、その「古典芸能」の「鑑賞の仕方」というものは、一体、どういうものになるのだろうか？ もちろん、それにもいろいろな方法があるかと思うが、基本的には次の「三つ」になるかと思う。——まず、一つは、やはりそれぞれの「古典芸能」の「基礎的知識」などをしっかりと学ぶことであり、一つは、できるだけ数多くの「舞台などを見聞きすることであり、そして、もう一つは、いわゆる「自らやってみる」ということである。恐らく、この「三つ」に尽きるのではないかと思う。

例えば、誰でもよく知っている「時そば」という落語があるが、もちろん、その話を全然知らない人たちも当然いるかと思う。それゆえ、最初は、何であれ、とにかく、一度、「時そば」の話を聴いてみることによって、その大体的内容を理解することになるかと思う。そして、その後も、いろいろな落語家が演じる「時そば」を何度も聴いていくうちに、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはいろいろな落語家が演じた「時そば」が、まさに「記憶保存」されていくことになるかと思う。そうすると、その次に、「時そば」を聴く時には、必ず、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」に「記憶保存」されているいろいろな落語家が演じた「時そば」と、「……つねに比較対照しながら、その一つ一つを分析的に見聴きすることになる」かと思う。そして、今度の「時そば」を最後まで聴き終わったあとで、あらためて今までのいろいろな落語家の演じた「時そば」と比較対照してみると、今度の「時そば」は、「……ああだったこうだったというような感想とともに、今までのなかでは、何代目誰々という落語家が演じた『時そば』が、いちばんよかったなあ」というような感想にもなるということである。そして、それは、例えば、歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」や「白波五人男」、その他の場合でも、まったく「同じことが言える」ということである。——一方、何らかの「古典芸能」などに「興味や関心」を持って、自らもやってみたいなあと思ひ、何年も練習を積み重ねては、その人なりに上達をして、いわゆる「自ら演じる」ようになれば、当然のことながら、今までのように、ただ単に「外から見聞きしていた時」には全く気づかなかった実いろいろなことが、まさに一つ一つ、わが身にかけて、実感として感じ知ることができ得るようになるのである。それゆえ、自ら演じること以上の「理解方法」は、どこにもないということである。

四、四つの要素

最後に、いわゆる「芸術鑑賞」について、もう少し考えてみたいと思うが、一般に、「芸術」という場合には、例えば、音楽、美術、彫刻、建築、工芸、その他、そのような分類になっていて、なぜか「文学」は、含まれないことが多いかと思うが、ここでは、敢えて「文学」をも含めて、いわゆる「芸術鑑賞」について、少し考えてみたいと思う。

例えば、「作品」というのは、間違いなく、作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの)から生み出されて来るものであり、それゆえ、「芸術鑑賞」とは、すなわち、最終的には、その「作品」が生み出された時の作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの)へと遡ることに他ならないのである。それをもう少し詳しく説明をすると、それは、次のようになるかと思う。——つまり、一つは、「作品」そのものの厳密な「鑑賞」であり、一つは、その「作品」が生み出された時の「作者」の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの)の「鑑賞」であり、そして、もう一つは、その「作者」の生い立ちや生活状況或いは時代背景、その他などの「鑑賞」であり、恐らく、この「三つのもの」を合わせて行なわれるものが、今日の、まさに「芸術鑑賞」になるかと思う。

*

*

それでは、もっと具体的に話をしてみたいと思うが、まず、「作品」そのものは、一体、何から成り立っているのかと問えば、それは、いわゆる「四つの要素」からであり、一つは、「素材」(材料)であり、一つは、「技術」(能力)であり、一つは、「内実」(内容)であり、そして、もう一つは、いわゆる「個性」から成り立っているものである。

まず、いわゆる「素材」(材料)であるが、それは、「……言葉、色(色彩)、音(音彩)、造形(姿・形)、香り(匂い)、感触、その他」を初めとして、もちろん、それらに加えて、「……紙、木、布、皮革、竹、土(粘土)、石材、様々な金属類、宝石、ガラス、絵の具(顔料)、漆、染料、その他」などがあるかと思う。そして、作者(或いは「芸術家」というのは、何よりも自分を取り扱う「素材」(材料)などに関しては、どこまでも精通していなければならない。——例えば、文筆家であれば、「言葉や文字」などに精通し、また、音楽家であれば、「音(音楽)や楽器」などに精通し、そして、陶芸家であれば、いわゆる「土(粘土)や釉薬」などに精通し、その他、何であれ、自分が取り扱う「素材」(材料)などに関しては、どこまでも厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」ことができなければならない。そうでなければ、真に優れた「作品」を生み出すことはなかなかでき難いということである。

次に、いわゆる「技術」(「能力」)であるが、それは、その人の生まれ持った「素質や才能」、その他などに加えて、その人のたゆまぬ「努力や実践」などによって、初めて、獲得されるものである。それゆえ、その人のたゆまぬ「努力や実践」なくしては、いわゆる「技術」の上達も熟練も、半永久的にあり得ないということである。それに加えて、もう一つは、その「技術」の上達にどうしても欠かせないものに、いわゆる「道具」類があり、その「道具」類に対しても、どこまでも精通していなければならない。そして、「技術」の上達とは、すなわち、まさに「道具」使用の上達とほとんど同意語であり、それほどまでに「技

術」と「道具」との関係は、切っても切れないほどの、まさに「一心同体的なもの」であるということである。そして、「技術」の上達こそは、そのまま「作品」の上達にも直結することになるのである。

次は、いわゆる「内容」（或いは「内実」）であるが、この「内容」（或いは「内実」）こそは、まさにその「作品」を生み出した時の作者の「思惟内容」（つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの）に他ならないということである。それをもっと簡単に言えば、「作品の内容」とは、すなわち、作者の「思惟内容」である、ということである。それに加えて、「芸術鑑賞」の場合には、どうしても「作品」そのものの「鑑賞」とともに、いわゆる「……作者は、一体、何を表現しようとしているのか、或いは、何を表現しなかったのか、また、ここはどうしてこういうふうになっているのか」などが、大きな問題になったりするものである。——例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』や『モナリザ』（例えば「謎の微笑」）なども、いろいろと議論されたりするものであるが、それは、すなわち、『最後の晩餐』や『モナリザ』という「作品」を生み出した時の、レオナルド・ダ・ヴィンチの「思惟内容」（それは様々な「思いや考え」+漠然としたもの）がぜひとも知りたいということに他ならないのである。つまり、「作品の内容」の理解とは、すなわち、その「作品」を生み出した時の作者の「思惟内容」（それは様々な「思いや考え」+漠然としたもの）の理解に他ならないということである。

最後に、「個性」（或いは「特徴」）であるが、その人の「個性」（或いは「特徴」というのは、その人の「遺伝的要素」と「環境的要素」からなり、そして、後者の「環境的要素」とは、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが形成されるとともに、その人の生み出す「作品」のなかには、当然のことながら、それらが「反映」されることになるかと思う。そして、ここで取り上げる「個性」（或いは「特徴」というのは、むしろ、ただ単に他の人^{ほか}と変わっているということではなく、むしろ「獨創性」があるかないかということであり、それでは、その「獨創性」とは、一体、どういうものかと問えば、それは、結局、その人が人間として真に「内的成長（成熟）」しているかどうかであり、その人の真に成熟した「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などから生み出されるものこそは、まさに真に「獨創性」を持ったものになり得るということである。

例えば、でたらめに楽器を演奏して、それを個性的（或いは「獨創的」）であると言っても、あまり意味はないだろう。それでは、なぜ、そうなのか？ それは、いわゆる「基本的なこと」がしっかりとマスターできていないからであり、「基本的なこと」がしっかりとマスターできていて、初めて、その基盤の上に、まさに「個性」（或いは「獨創性」というものは、自ずと生じて来るものであり、逆に、「基本的なこと」ができていない状態では、いわゆる「個性」の発揮のしようがなく、それは、ただの「でたらめ」になってしまうのである。それは、人間の場合にも基本的には全く同じことが言えるのである。

そして、真に「個性的」（或いは「獨創性」）があるというのは、むしろ、ただ単に他の人と変わっているということではなく、大事なことは、まさに「素材」「技術」「内実」それぞれが真に優れているとともに、さらに、真に優れたその人なりの「獨自性」（つまり「オリジナリティー」）があるという時にこそ、初めて、真に「個性的」（或いは「獨

創性」のある「作品」という「評価」になるのであり、また、真に優れた「作品」にもなり得るということである。(つまり、あれこれの小手先の問題ではないのである。)

以上、いろいろな例を挙げての「芸術鑑賞」についての考察であるとともに、もう一度、最初から最後まで丁寧に読んでもらえれば、いわゆる「作者」と「作品」、それに「芸術鑑賞」についての、ひと通りの理解が得られるのではないかと思う。

*

*